

## 週日の説教

金 大烈 神父 2009年7月9日(木)

### 《私たちの使命は、まず行ってみること》

今日の第一朗読(創世記 44・18 21a、23b 29、45・1 5)は、ヨセフの物語の結末になっています。最後にヨセフが、兄達にこのように話す場面ですよね。

「今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。」

実際にこのようなことが私たちの人生でも結構あるのではないのでしょうか。あの人より自分のほうが、こういうことに相応しくて、完璧にできると思うのに、なぜイエス様は、自分ではなくあまり相応しくなく見えるあの人を使うのか。家族の中でも、兄より自分のほうが、もっと上手くできると思うのに、なぜ神様は、私にさせないで兄にさせるのか。

いろいろな場合があります。しかし、振り返って見れば、「神様は、私たちそれぞれを一番相応しい道に導いてくださった」と悟る日がいつか必ず来ると思います。もちろん、中には悟れない人もいるでしょう。その人はいつも憎しみで否定的な心を持って、死ぬ時まで行くのでしょうか。しかし、祈っている私たちならば、大体いつかは、「なぜ、この道を歩まなければならなかったのか」、その意味について自然に分かる日が必ず来ると思います。そしてその後、感謝の心が自然にできるでしょう。

次に、福音(マタイ 10・7 15)を読みますと、目に留まったのは二つの箇所です。

一つは、「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」というところです。こういうことをもう少し多くの人々が悟れば、飢え死にってしまう子ども達はものすごく少なくなるでしょう。しかし、多くの人間の愚かさは、自分の力で今のような自分になったと錯覚していることです。頭が優れた人も、お金をたくさん持っている人も、権力を振るう人も、結局は自分の力によって受けたわけではありません。自分が高いところに立つためには、踏まれる人々をたくさん存在させてしまいます。自分がお金をたくさん儲ければ、飢えてお腹をすかせている人を作ってしまう。

こういうことを意識して、理解できるようになれば、そんなに偉そうな顔をすることはできないでしょう。手を伸ばしている人を拒むことはできないでしょう。

私たちは、誰かによって今の位置を作っているのだと思います。そして、もっと信仰的に考えれば、自分の命さえ神様が許してくださなければ自由にはできない、と認めなければならないでしょう。結局、私たちはただでもらったのです。だから、ただで、二倍三倍に返さなければならないのです。それをいつも心に置いて生活するのが、私たちの望ましい姿ではないでしょうか。

自分の力でここまで来たと、絶対に思わないでください。一番大きい罪に陥る間違いです。それだけは、いつも意識しましょう。

二番目です。今日、このような話がありますね。

「家の人々がそれ(あなたがたが願う平和)を受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。」そして、門前払いをする人々もたくさんいることをイエス様はおっしゃいましたね。その場合には、その町や家を離れるときに、はきものについたほこりを払うようにおっしゃいました。

どういう意味でしょうか？ 私たちが行うことには、条件があるのです。まず、やってみなければならぬ、という条件です。私たちが近づいて、み言葉を伝えようとしても拒まれる場合もあります。自分が予測したとおりにはならない場合があることを、イエス様は話しているのです。その相手が、受け入れてくれるかどうかは、直接行って、見て、確認しなさい、と言っているのです。そういう意味で、私たちは今まで、宣べ伝えることをどのくらい意欲的に行ってきたか、反省するべきではない

でしょうか。

神様は、「まずやってみなさい。受け入れられなければ仕方がない。その平和はあなたに戻る。その後は私が責任を取る。」とおっしゃっているのではないのでしょうか。

結局、私たちに与えられている使命というのは、まず行ってみることです。「自分からは何もしないで‘できない’‘できない’と言うのは、赦されないことである」ということを、このミサを通してもう一回考えてみましょう。

皆様、もう何回も申しあげましたが、もし皆様によって一人の霊魂が救われるならば、それは何という幸せでしょうか。逆に、もし自分の消極性によって、救われるはずの人がそのまま崩れてしまうとしたら何という悲しさでしょうか。

私たちが出会う全ての人々は、お互いに助け合わなければならない、福音的に付き合わなければならない相手であること、本当に大事な存在であることを意識しましょう。

ありがとうございました。